

# デ・レーケと富山

明治政府は、川の下流部に港のある淀川や、信濃川の改修には熱心だったが、港のない木曾川の改修には関心が薄かった。しかし、明治10年、たび重なる洪水被害に耐えかねた三重県令(今の県知事に相当)と愛知県令が連名で、オランダ人技術者を木曾三川に出張させてくれるように内務省に陳情すると、デ・レーケを派遣することを決めた。デ・レーケは、明治11年2月23日から3月6日まで木曾川周辺を視察した。視察から1ヶ月後、デ・レーケは、木曾川に関する報告書を書き、和訳版も作られた。「木曾川概況」と呼ばれ、現在

も木曾川改修の原点となっているそうだ。

その後、デ・レーケは、エッシヤーが設計した九頭竜川河口の三国港(福井県)の防波堤兼導流堤の工事にも携わる。この工事は、上流

から多量に流れて来る土砂でふさがれていた河口に防波堤兼導流をつくり、川を流れる水の力で土砂を海に押し流し、河口の水深を深くしようとする設計だった。デ・レーケは工事現場に何度も足を運び、日本海の荒波と戦い、2年7ヶ月の工期で、明治13年12月14日に開港した。工事はその後も続けられ、近代土木技術で計画・設計・施工された日本で最初の港湾となった。

デ・レーケは、次々に合理的な工法を提案し、なにごとにも公正に判断し、適切に指示・指導したた

め、評判が高まり、木曾川の支川の工事、名古屋近辺の県の河川工事、兵庫県西海岸の河川改修計画、博多港や四日市港の改築計画など多くの仕事を頼まれるようになっていった。

明治20年頃まで明治政府が雇った外国人は2000名以上にのぼったそうだが、明治8年頃になると近代技術や西洋文化を受け入れる基礎がある程度固まり、富国強兵を目指す政府は歳入の大部分を陸・海軍に費やすようになったため、外国人を多数解雇していくようになった。そんな中、まじめに仕事を続けてきたデ・レーケは、政府要人や木曾三川の住民らに重宝され、明治14年秋から翌年6月まで、初めての休暇帰国を全額有給(3ヶ月分前払い)という特別待遇で行うことができた。<sup>6)</sup>